

情報化時代における国際理解

李 基 愛

I 情報化時代と国際相互理解

今日、情報化をめぐる最近の技術開発は、情報処理を飛躍的に高め、コンピュータと連動するコミュニケーション・システムは極めてグローバルな性格を有するなど、情報化が進むにつれ、様々なインパクトを諸国家間に与えている現状がある。^(註1)

情報の国際交流は国際間の政治的あるいは文化的交流とともに国際社会における重要な交流機能としてその可能性が注目されているが、同時にこれが国の利益を中心として働く場合、第三世界を中心とする東西の政治・経済戦略の武器として利用され得るといふ制約も見逃すことはできない。

情報化の発達は諸国間のコミュニケーションを飛躍的に迅速かつ容易にしたものの、その根本に横たわる問題、つまり、我々人類はどのような意図でそれを利用してゆくのかという問題は未解決のままであるように思える。原水爆はそれを開

発し、発展させた人類自らを脅かしているように、情報もまた利用する者の意図により、人類自らが望まぬインパクトを与えることもあるのではないか。

国際相互理解を情報に大きく依存した形態で進めてゆこうとする時、その情報の発信者、流通者の意図が理解を促進する際の大きな要因となることは否定できない前提であると思われる。

なんとすれば理解を結ぼうとする意志、そして理解に到るためのすべての選択は他ならぬ一人一人の手に委ねられているからである。

II 国際相互理解の目的

上記のような前提を踏まえた上で、国際相互理解とは何かということを考えてみたい。

国際とは諸国家、諸国民に関係することと辞書に定義がある。また理解とは物事の道理をさとり知ること、のみこむこととある。私見による定義では国際相互理解とは「諸国家、諸国民が相互に物事の道理や本質をさとり知ることとなる。それでは物事の道理や本質とは何かということになるが、ここではその議論よりも、何の為に国際相互理解を進めてゆくのかということに言及してみたい。しいてはそれが物事の道理や本質をさとり知ること（理解）にも関わってくるように思われるからである。

まず国際相互理解を進めることにより、私達が何を達成したいのか、何の為に国際相互理解を進めてゆくのかという目的意識を明確化する必要がある。何故なら、目的を踏えることにより、国際相互理解をどのように進めるかという方法論への移行が可能だと思われるからである。

諸国間、諸国民は何を目的として相互理解を進めてゆくのだろうか。

人類の歴史の過程において、闘争と破壊、対立と摩擦は幾度となく繰り返されてきたが、その中で自由と平和、愛と調和を求め、努力してきた人類の歴史をも見逃すことはできないであろう。しかし、人類が長い歴史を通して自由と平和、愛と調和を求めてきたにもかかわらず、何故いつの時代にも争いや破壊、対立や摩擦は絶えなかったのか、何故末だ人類の願いとは正反対の症候群、例えば、東西両陣営の対立、刻の脅威、南北問題、経済摩擦、民族間の対立、人種差別、宗教的軋轢、などが続いている、今や地球の存続すら威嚇しているところまでできているのだろうか。これらの深刻な問題も根本的には、皆それぞれ違いをもつ同じ人間だという観点に立って、共に生きるための理解に結ぼうとする意志の働きよりも自分達の利害により、お互いのちがいだけに目を奪われ、不理解の方向へと向かったことに大きな原因があるように思われる。

国際相互理解を進めてゆく上で、このようなお互いの利害やちがいによる対立や自己主張よりの摩擦、争いを乗り越え到達すべき究極的な目的として、人類を含め、地球上の他の生物との共存、共生、諸国間・諸国民相互による信頼、平和、調和の実現などが挙げられる。

III 相互理解を阻む原因

しかし、そのような人類の根源的な念願は何故いまだその実現を見ないのだろうか。

ここで、国家間の理解を阻む要因は一体何であるのか、それを探ってみよう。

(1) 言葉の制約

まず最初、言葉の制約が取りあげられる。言葉を媒体とする相互理解において、言葉の持っている属性より不理解が生ずる可能性が高い。国家間の情報の処理やコミュニケーションはほぼ言葉によって行われる。しかし、言葉のもつ可能性

や制約を認識しないまま、言葉を媒体として理解を結ぼうとすることは極めて困難なことである。

米国の文化人類学者エドワード・T・ホールとミルドレット・R・ホールはどの文化においても文化間においても常に理解の妨げとなるのは、言葉の意味が転換してしまうことであると指摘している。^(註2)

ここでは、その大まかな理由を二つ提示したい。

① 言葉には主観的な要素が含まれている

例えば、ある人が日本に生まれ、日本語を母国語として受け入れ、生まれ育った過程においてすでに日本の風俗・習慣・教育・その他、日本という国に根づいたものの見方や考え方、立場を持っていることは当然であろう。また、その人が言葉を媒体として情報を伝達しようとする時、やはり日本的なもの見方や考え方、立場を持ってしまふ。また、国の意見や主張もその国の人間によって発せられるものである以上、上記のような制約から免れることはできない。言葉のみで相互理解を図ろうとする時、すでに我々はそのようなお互いの主観によるもの見方や立場を持ってしまひ、それが誤解や不理解を生む原因の一つになる。

ここで一つの例を考えてみたい。一九八四年、韓国の全斗煥大統領訪日の際、天皇のお言葉の中で「過去一時期あった不幸な歴史は真に遺憾である。」という一節があった。この遺憾という言葉に対する認識は当時日韓のマスコミの間で妙な違いを見せた。遺憾という言葉のもつ意味あい韓国と日本では違うのである。韓国で使われる遺憾という言葉は日本語の残念という言葉がもつ意味合いで、非常に日常的に軽いタッチで使われている。当時韓国人が天皇に期待していた謝罪の言葉として、あまりにも満たされなかったため韓国内では大きな反発の声があったのである。理解を結ぼうとして発した言葉であっても、言葉の背景を異にする国家間ではしばしば誤解を生む危険性が存在しているのである。

② 言葉を実体と想う錯覚

言葉は動的な世界の一部を一つの枠組みの中に固定化させてしまう性質を持っている。例えば、「韓国」という言葉を聞くと様々なイメージを言葉で浮かべらるだろう。かなり正確なイメージで捉えたとしても、「正式名称は大韓民国、面積・九万八千km²、人口・約四千万人、首都・ソウル、気候は温帯性、経済形態は資本主義、言語はハングル、一九八八年夏季オリンピックが開かれた国」というようなものである。しかし、人口や面積なども変化しており、実体としてはすべてが自然の推移、その他、歴史を背景に持っている他の国々との関係の中で動いているものである。その刻々と移り変わる実体を「韓国」という一つの言葉のイメージの枠組の中に固定させてしまっているのである。このように言葉は実体を表わそうとする媒体ではあるが、言葉でものを考えることに慣れた私たちは言葉そのものがあたかも実体であるかのような錯覚を抱き、その感覚で言葉を使っている現状があるのではないか。

ここに言葉を用いて情報を伝達し、相互理解を図ろうとする際に生まれる誤解や不理解の大きな要因の一つがあるように思う。

(2) 国の持つ精神的な基盤の制約

相互理解を阻む他の要因として、相手の国がどのような基盤を持っているか、その国のありのままの姿、その国のもつ様々な要素を把握していないという点が挙げられる。言わば自国の尺度でしか相手国を測っていないところに相手国の実体を見せなくさせる原因がある。

ここで一つの例を考えてみよう。日本という国を形造る要素は様々であり、他の国々についても同じことが言える。そこで日本という国と韓国という国を形造っている幾つかの要素を挙げてみることにしてお互いの基盤がいかにかがうかを見てみよう。

・ 日本民族が持つものの見方、考え方としては察する、以心伝心、腹芸、自然に対する一体感、年功序列、鎖国感覚、

村意識等。

• 日本の自然、風土としては島国、四季の推移、台風、地震、豊富な水等。

• 日本の歴史的側面としては鎖国、明治維新、脱アジア化、敗戦、欧米志向、技術立国化等。

その他、上記以外の様々な要素（経済的要素、政治的要素、地理的要素等々）が日本という国を形造っていて、そこから日本特有のものの方、考え方が生まれてくる。

次に韓国を見てみよう。

• 韓国の民族がもつものの見方、考え方としては恨、祖上崇拜、傲気感覚、年功序列等。

• 韓国の自然、風土としては半島、大陸性気候、岩山等。

• 韓国の歴史的な側面としては党争、日本の植民地、朝鮮戦争、南北分断、経済急成長等。

これら様々な要素によって韓国特有のものの方、考え方が生まれてくる。

ここで、韓国民族が持つものの見方、考え方として恨（ハン）、傲気（オギ）、人情（インチョン）について説明することにする。

まず、恨という感情。朝鮮半島は三年に一度戦争があったと統計が示しているように、外からの侵略が多かった。これは地政学的な要素と密接な関係があると思われるが、その戦いに勝った例は数少なく、ほとんど蹂躪されどおしであった。こういう戦争や権力者の弾圧で庶民は不安や不満を心の中に押し込めるしかすべがなかった。だれにもぶつけられないこの感情がいろいろな形でじわじわと出てくる。これを恨という。一度根に持つとなると、相手の気持ちなどおかまいなしに何度も同じことをまくりだしたてる。韓国ではよく恨を晴らすという。特に女性の恨は恐ろしいもので、女性が恨を抱くと、「五、六月にも霜が降る」という諺があるほどである。

次に傲氣という感覚も朝鮮半島の歴史や社会情勢と深い関係がある。「傲氣」とは、本当は自信がなくても、弱気を見せるところか、もっと自信があるようにふるまうことをいう。しかも明らかに負けたのにその事実を認めようとしないだけでなく、一歩進めて、明日の勝利を誓う気持ちが含まれている感情である。

最後に人情。強い者を恐れず、追いつめられた者や傷ついた者を身をもってかばうこと。計算抜き感情である。韓国は、地理的、歴史的条件のため、外からの影響を受けやすく、そのせいで不幸になった場合が多かった。韓国社会では人情論がけっこう説得力を持つのはそのためである。

前記の日本と韓国の例からもわかるように両国を形造っている基盤がいかに異なるかということである。そして、そこから生まれてくる発想や価値観、道徳観、ものの見方、考え方が国によってそれぞれ違うということである。従って自国の基盤で他の国々を見ている限り、いくら理解しようと思い、努力しても、そこから生まれるものは誤解と偏見のほうが多いということである。

実体を見させないこの自国の基盤と相手国の基盤に対しての認識の不充分さが理解を阻む要因になっていると言える。

(3) 利害の一致による理解

次に我々が「理解する」と言葉で捉えていた理解と本来の理解とのギャップが取りあげられる。では我々が「理解」として捉えてきたものはどのようなものであろうか？

国家と国家とはどのような関わりをもって理解し合えたと呼んできたのだろうか？

国家間が相互理解に到達したという時には利害の一致（それが政治的、経済的、その他の面であれ）を見た場合が多かったのではないか。一国は他の国（国々）が自国に表面的であれ、好意を持って交わろうとした時、またお互いの国にと

って利をもたらずような同意、合意に達した時、理解し合えたとしてきたように思う。

自国の立場を認めてもらうこと、自国の意見を聞いてもらうこと、自国の意向に従ってしてくれることを「理解」してくれる「解って」くれると解釈してきたところが多かったのではあるまいか。しかし、それは「利害の一致」による一時的な妥協であって、本来の理解とは言えない。「利害の一致」を中心とした合意、同意を理解だと思い誤っていたところに本當の理解を阻む大きな原因があると思われる。

IV 情報化時代における国際相互理解に向けて

前述のように相互理解を阻む要因を幾つか見てきた。ここでは、それらの要因を踏まえた上で相互理解を進めてゆく可能性を探ってみたい。

(1) 言葉の可能性

相互理解の為の手段として言葉に頼っている私達は何よりも言葉が持つ制約を見つめてみることを必要とされている。チャールズ・ギャラウエクのデータによると、人間のコミュニケーションは言葉で七%、話し方で三八%、残り五五%は身振りや表情によって行われるというコミュニケーション論の新しい考え方を示している。^(註3)このデータからも明らかかなように言葉というものが人間のコミュニケーションにおいて実に頼りなげなものであるということが言える。

情報化時代に生き、情報の伝達と言葉に大きく依存する我々は、言葉それ自体は物事の実体ではないということの再認識が必要である。実体ではない言葉が氾濫し、誤解を生みながら言葉にのみこまれている現状を踏まえて、言葉を通しての理解に取り組むことが求められている。

本来の言葉というものが人間と人間とを結ぶために生まれてきたものであるならば、その本来の機能を回復する為にも、

村意識等。

• 日本の自然、風土としては島国、四季の推移、台風、地震、豊富な水等。

• 日本の歴史的側面としては鎖国、明治維新、脱アジア化、敗戦、欧米志向、技術立国化等。

その他、上記以外の様々な要素（経済的要素、政治的要素、地理的要素等々）が日本という国を形造っていて、そこから日本特有のものの方、考え方が生まれてくる。

次に韓国を見てみよう。

• 韓国の民族がもつものの方、考え方としては恨、祖上崇拜、傲気感覚、年功序列等。

• 韓国の自然、風土としては半島、大陸性気候、岩山等。

• 韓国の歴史的な側面としては党争、日本の植民地、朝鮮戦争、南北分断、経済急成長等。

これら様々な要素によって韓国特有のものの方、考え方が生まれてくる。

ここで、韓国民族が持つものの方、考え方として恨（ハン）、傲気（オギ）、人情（インチョン）について説明することにする。

まず、恨という感情。朝鮮半島は三年に一度戦争があったと統計が示しているように、外からの侵略が多かった。これは地政学的な要素と密接な関係があると思われるが、その戦いに勝った例は数少なく、ほとんど蹂躪されどおしであった。こういう戦争や権力者の弾圧で庶民は不安や不満を心の中に押し込めるしかすべがなかった。だれにもぶつけられないこの感情がいろいろな形でじわじわと出てくる。これを恨という。一度根に持つとなると、相手の気持ちなどおかないしに何度も同じことをまくりたてる。韓国ではよく恨を晴らすという。特に女性の恨は恐ろしいもので、女性が恨を抱くと、「五、六月にも霜が降る」という諺があるほどである。

次に傲氣という感覚も朝鮮半島の歴史や社会情勢と深い関係がある。「傲氣」とは、本当は自信がなくても、弱気を見せるどころか、もっと自信があるようにふるまうことをいう。しかも明らかに負けたのにその事実を認めようとしないだけでなく、一歩進めて、明日の勝利を誓う気持ちが含まれている感情である。

最後に人情。強い者を恐れず、追いつめられた者や傷ついた者を身をもってかばうこと。計算抜き感情である。韓国は、地理的、歴史的条件のため、外からの影響を受けやすく、そのせいで不幸になった場合が多かった。韓国社会では人情論がけっこう説得力を持つのはそのためである。

前記の日本と韓国の例からもわかるように両国を形造っている基盤がいかに異なるかということである。そして、そこから生まれてくる発想や価値観、道徳観、ものの見方、考え方が国によってそれぞれ違うということである。従って自国の基盤で他の国々を見ている限り、いくら理解しようと思い、努力しても、そこから生まれるものは誤解と偏見のほうが多いということである。

実体を見させないこの自国の基盤と相手国の基盤に対しての認識の不充分さが理解を阻む要因になっていると言える。

(3) 利害の一致による理解

次に我々が「理解する」と言葉で捉えていた理解と本来の理解とのギャップが取りあげられる。では我々が「理解」として捉えてきたものはどのようなものであろうか？

国家と国家とはどのような関わりをもって理解し合えたと呼んできたのだろうか？

国家間が相互理解に到達したという時には利害の一致（それが政治的、経済的、その他の面であれ）を見た場合が多かったのではないか。一国は他の国（国々）が自国に表面的であれ、好意を持って交わろうとした時、またお互いの国にと

我々一人一人がお互いを理解しようとする理解への情熱が必要にされているのではないか。大切なことは言葉の制約を知りつつ、言葉にならない相手の感情や気持ちを受けとめようとする努力であろう。

ここに相互理解を言葉を媒体として結んでゆく際の大きな可能性が開かれるのではないかと思われる。

(2) 国の持つ精神的な基盤の可能性

相互理解を阻む一つの要因として、国々の基盤のちがいを取りあげた。ここで大切なことは国々がお互いに自らの基盤をよく見極めると同時に他の国々の基礎を見極めることである。例えば、日本人が持つ基盤から韓国を理解しようとしても、それはあくまでも日本の基盤から見た韓国像であること、韓国のありのままの姿ではない。ここで言えることは韓国をありのまま理解しようとするには、日本の基盤を知ることが先決だろう。逆に韓国人が持つ基盤から日本を理解しようとする時と同じである。韓国人の「反日」という感情の中に含まれている恨や傲気という精神的な基盤からは日本のありのままの姿は見えない。どうしても歪んでしまうのである。何故なら、自国の基盤がどのようなようになっていくのか、又、自分がその基盤で物事を判断しているということが明らかでなければ他の国々との違いによる違和感だけが大きくなり、到底理解には進めない。又、自国の基盤に基づいた善悪観や価値観に合わない場合は相手国を非としてしまいがちである。何故相手国が自分では理解できない考え方をするのか、行動をとるのか、それはその国の基盤を理解しなければわからないであろう。ここで自国と相手国の基盤を見極め、国家間の相互理解を深めながらその国々が持っている基盤から可能性を見出すことが必要になってくる。

ここで言う国々が持っている可能性とは国際相互理解の目的のところ而言及した世界の自由と平和、愛と調和を築いてゆくための、その国々の働きであり、役割である。今の日本の場合で言えば、日本民族の基盤にある同共同体における個の意識、自然に対する一体感などの可能性を、又、韓国の場合はあらゆる苦難を乗り越えながら身につけた知恵、他の痛み

を感じ得る共感力などの可能性を、それぞれの国自身がもっと明晰に意識化してゆく必要があるのではないか。

(3) 利害一致の次元の理解から共存の次元の理解

自国の利益のために最もエネルギーを注ぎ、その為に競い合い、争い合ってきた人類の歴史から我々が学ばなければならないことは利害の一致を中心にした関わりは最終的には理解と正反対の結果を生んでしまうということである。それは国同士が政治的、経済的、宗教的、あるいはその他の要因にせよ、お互いに妥協点を見出せない時、それがしばしば紛争に発展してきた歴史を見ても明らかであろう。国家間は自国の利、自国の都合を中心として働き、お互いの合意に達し得なかった時、理解を結ばなかったという見方を持ってきたからである。今まで私達が国家間の理解だと呼んできたものが本当の理解ではなく、自国の利益という視点から見た表面的な言葉上の理解であったことを再認識すべきである。例えば今日の日米関係においても、お互いの間に理解という言葉がしばしば使われている。

しかし、それが本当の理解なのかどうかは疑問である。

今日情報化は益々進み、国家間の情報交換も急速に増えているが、現状のような利害中心の関わりは以然としてその根底に横たわっている。

お互いの利害に基づいた今までの理解に対する認識を再検討し、人類が共存するということを目的とした理解に結んでゆくこと。自国が生きる為にも国家間が相互に生かし合うという次元での理解を進めてゆくことが、今切実に必要とされているように思える。

参考文献 註1. 『国際コミュニケーションの課題と展望』 日本新聞協会研究所 一九八三年 P1

註2. 『摩擦を乗り切る』エドワード・T・ホール、ミルドレット・R・ホール著。文芸春秋 一九八七年 P32

註3. 『NASA式による危機管理学』 大林辰蔵著。KKロングセラーズ発行。一九八三年 P154